

[論 文]

## 児童期の自由遊び場面におけるいざこざ

The Conflicts among the Elementary School Children during Free Play

藤 田 文

Fujita Aya

### Abstract

The conflicts during free play in the elementary school children were observed and analyzed to examine if the strategies adopted for resolving conflicts with same-age-group members were different from those with different-age-group members; and for resolving conflicts with same-sex-group members were different from those with different-sex-group. The participants were 32 first grade, 19 second grade, 11 third grade children in the elementary school. Observations were made 13 days using a tape recorder and field notes. Eighty-one conflict episodes were collected and analyzed. The main results showed that the conflicts among same-age children tended to come to an end through mutual agreement while those among different-age children did not. And the conflicts among same-sex children tended to come to an end through mutual agreement while those among different-sex group did not. These results suggested that children adopted different strategies in resolving conflicts according to the rival's age and sex.

### 【問題と目的】

共感性や思いやりなどの社会的能力は、仲間同士の社会的葛藤つまりいざこざを通して発達していくと考えられている (Shantz, 1987)。自分と違う意図や特質を持った相手と交渉をすることで他者の存在を意識し、自己と他者の関係の調整方法を修得していくのである。従って、いざこざは仲間関係においてマイナス要因として考えられがちではあるが、発達にとって肯定的な意味を持っている。

いざこざは、ほぼ同年齢の仲間との間で生じるもので、木下・斉藤・朝生 (1986) では「子ども A が B に何らかの行為をし、子ども B がそれに対し、何らかの抵抗や抗議を示した相互交渉場面および子ども A の B に対する不当な行動・発話を含む相互交渉場面」と定義されている。同様の意味で、山口・香川・谷向 (2009) では「いざこざとは、二者以上の子どもの中で何らかの意図や主張のずれがあり、それを相手に表出しようとする場面である」と定義されている。

従来のいざこざの研究は、幼児期のいざこざの解決過程を取り扱っている。ほとんどの研究が、幼児の自由遊び場面の相互交渉を観察し、いざこざの原因、解決のための方略、

終結に焦点をあててその特徴や発達的变化を検討している。

幼児期のいざこざの原因は、全体的に「物や場所の占有によるいざこざ」が多いことが示されている(倉持, 2001)。また、3歳児では「不快な働きかけ」と「物や場所の占有によるいざこざ」が多く、加齢に伴い「規則違反」や「イメージのずれ」が多くなるという発達的变化が示されている(木下ら, 1986; 山口ら, 2009)。いざこざの原因の変化は、子どもの遊びの内容の発達に左右されている。加齢に伴い、遊びの構造化が進み、ごっこ遊びの役割、見立て、ストーリーなどのイメージを共有できるようになるために、イメージのずれも生じやすくなる。また、ルールの共有もなされるようになり規則違反が原因のいざこざも増加すると考えられる。

いざこざの方略は、3歳児では「単純な抵抗」「拒絶・拒否」や「実力行使」という攻撃的な方略が多く使われていた(田中・阿南・安部・糸永・松尾, 1997; 梅本・財津, 2000)。また、3歳児では行動方略と言語方略が半数ずつ見られた(平林, 2003; 浅賀・三浦, 2007; 山口ら, 2009)。行動方略には、「身体的力」(おもちゃから手をはなさずに相手を押しやる、相手を引き離しておもちゃの保持に努める行動)、「距離化」(おもちゃを上を上げたり、相手に背を向けるなど自分の位置は変えずに持っているものを相手から遠ざける行動)、「逃げる」(後ろに下がったり走ってその場を去る、おもちゃを持っている子どもが自分の位置を相手から遠ざける行動)などが見られた(高坂, 1996)。また、3歳児でも言語方略を使用するが、不快な発声や、相手への非難や自分の主張が多く、徐々に、ルールへの言及(「先に使っていた」、「独り占めにしちゃいけないんだよ」)や心理的圧迫(「仲間に入れてあげない」、「もう家に来ないで」)が増加する(倉持, 2001)。

4, 5歳児になると言語方略が増加し、「依頼」、「現状説明の指摘」、「理由を聞く」などが多くなった(山口ら, 2009)。また、「先取り」(物を先取りしていることを主張)、「イメージ」(遊びの役割・プラン・状況設定上自分が争点となるものを持つことがふさわしいことを主張)、「限定」(物や場所を借りる側が「少しだけね」「すぐ返すから」など少ない量や短い時間でしか借りないことに言及、「条件」(物や場所を貸す側が「少しならいい」「ちょっとね」など少ない量や短い時間だけ貸すことに言及)、「独占」(「いっぱい使っている」「一回も使っていない」など先取りしている側が共有しなければならないものを独り占めしていることを指摘し、先取り側が絶対的な優先権を持っているわけではないことを示す)などの相手との交渉を含む言語方略を使用するようになることも示されている(倉持, 1992)。

このように加齢に伴い、いざこざを解決することよりもまず自己の意思を押し通そうという方略から、言語的に相手と交渉しいざこざを解決しようとする方略に発達することが明らかにされている。

いざこざの終結は、3歳児では「無視・無抵抗」「単純な抵抗」「ものわかれ」が多い(木下ら, 1986; 浅賀ら, 2007)が、5歳児では、「自然消滅」や「相互理解」による終結が多かった(斉藤・木下・朝生, 1986; 山口ら, 2009)。いざこざが成立しない状態から、いざこざを回避する方向や、相互の意図を調整し相互理解にいたるよう発達することが示されている。

しかし、これら従来のいざこざに関する研究は、幼児期の子どもを対象としており、児

童期の子どもを対象とした研究はほとんどない。確かに、3歳児から5歳児にかけていざこざの出現数は減少する（梅本ら，2000）が、児童期でも子ども同士のいざこざは継続して発生していると考えられる。従って本研究では、児童期の子どもを対象とし、いざこざの原因、解決方略、終結について検討することを目的とする。

また、従来のいざこざの研究では、異年齢の子ども同士のいざこざについてはほとんど検討されておらず、梅本・財津（2000）の幼児の研究においてわずかに検討されているのみである。この研究では、いざこざの原因は、同年齢、異年齢ともに「不快な働きかけ」が多かった。異年齢でのいざこざの解決方略では年上の子どもが使用するものとしては「実力行使」が多く、一方、年下の子どもが使用するものとしては「受容」が多かった。年下の子どもの方も「実力行使」や「拒絶・拒否」といった強い姿勢を見せるが、結局は年上の子どもが立場的に優位になるという傾向が目立った。終結においては異年齢では「無視・無抵抗」、同年齢では「自然消滅」が多かった。異年齢では、自分の意思を相手に示すことなく終了しているが、同年齢ではそのまま自然に終了したり、相手に単純な抵抗をしたりするなど多少の意思表示が見られた。

このように、梅本・財津（2000）の研究は、同年齢と異年齢を同時に検討はしていたものの、全体的にデータの数が少なかった。また、幼児期とは異なり児童期になれば異年齢のいざこざは年上の子どもが受容するということもみられるのではないかと考えられる。そこで本研究では、児童期の子どもの異年齢のいざこざを検討する。

さらに従来のいざこざの研究では、子どもの性別による違いは検討されていなかった。従って本研究では、男児同士、女児同士、異性同士による性別ごとのいざこざの違いも検討する。

以上のことから、本研究の目的は、児童期のいざこざの原因・方略・終結の違いを、同年齢と異年齢、また同性と異性で比較検討し、相互交渉のあり方を明らかにすることである。

## 【方 法】

**対象者：**本研究の対象者はA市内の小学校の児童育成クラブに所属する1～3年生の男女全員だった。児童育成クラブは1～3年生の男女（62名）が所属していた。内訳は、1年生が32名、2年生が19名、3年生が11名だった。児童育成クラブでは1～3年生の小学生が放課後に勉強をしたり室内や外で遊んだり自由に過ごしている。室内では主に読書やゲームや剣玉などをする。また、帰る前にはおやつ時間も設けられている。

**観察時間：**観察時間は、述べ109時間だった。6月～7月の放課後の午後3時～4時までの1時間、7月24日～8月の夏期休暇中の午前9時～午後5時までの8時間を観察時間とした。

**手続き：**小学校の児童育成クラブを訪問し、自由遊び、おやつ、宿題をする時間の行動を観察した。1回の訪問につき1～3人の観察者が観察を行った。遊んだり勉強したりしている小学生の中に入って、一緒に過ごしながら観察をする参加観察の方法をとった。

観察者1人につき1台のテープレコーダーと小型マイクとフィールドノートを使用した。フィールドノートには、「結果」に示しているいざこざの原因と解決方略と終結のカ

テグリーをチェック項目リストとして載せており、いざこざが生じたときにチェックをできるようにしてあった。観察者はいざこざが生じた場合を記録し、テープレコーダーにリアルタイムでいざこざの状況（まわりの様子・発話・行動など）を吹き込みながら、チェック項目リストをチェックし、関っている子どもの名前・学年といざこざの原因・方略・終結を詳細に記入した。

いざこざが起きている間はその場から少し離れ、関与を控えた。また、小学生からの助けなどを求められた場合には、いざこざの内容に関することは口出ししないよう対応した。

### 【結 果】

分析方法：録音したテープを再生し、いざこざのエピソードを抽出した。子どものやりとりを文章化した逐語録を作成した。いざこざの開始については田中ら（1997）の研究と同様に、「ある子どもが他の子どもに対して不当な行動、不満、拒絶、否定などを示す行動があれば、それにさかのぼっていざこざの開始」とみなした。分類のあいまいなエピソードについては、研究協力者と2人で協議してカテゴリーを決定した。

いざこざのエピソード数は、1年生同士で44件、2年生同士で7件、3年生同士で2件、異年齢同士では28件で、合計で81件だった。1件のいざこざのエピソードに登場する子どもの人数は2人から6人だった。

いざこざの原因・終結の分類に関しては、田中ら（1997）のカテゴリー表を使用した。いざこざの方略の分類に関しては、田中ら（1997）と倉持（1992）のカテゴリー表を参考として作成した。それぞれのカテゴリー表は付録に示した。

#### （1）同年齢同士と異年齢同士のいざこざの原因の違い

ここでは、いざこざのきっかけとなる原因を分類し、同年齢同士のいざこざと異年齢同士のいざこざとで比較した。同年齢と異年齢の各原因カテゴリーに分類されたエピソードの割合を図1に示した。図1より、「不快な働きかけ」が同年齢同士で34.6%、異年齢同士では28.6%と共に多かった。ちょっかいを出したり、髪の毛をひっぱったりなどちょっとした働きかけが原因となりいざこざとなっていた。

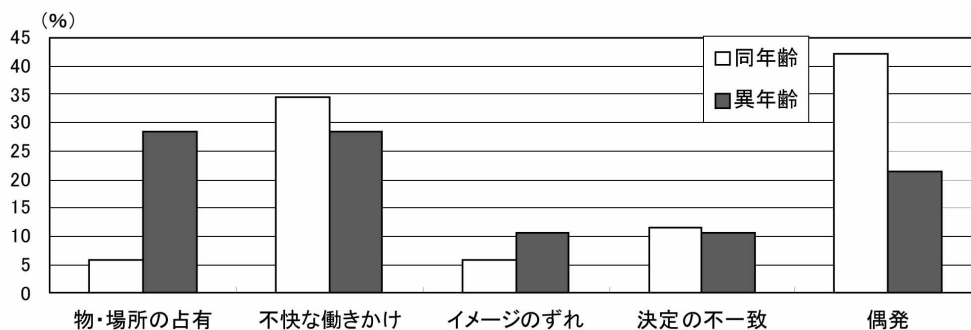


図1 同年齢と異年齢のいざこざの原因

同年齢同士では、「偶発」が42.3%と最も多かった。同年齢同士の「偶発」は、何気ない言動が相手にとっては気に食わずにいざこざへと発展してしまうケースが多かった。異年齢同士では、「物・場所の占有」が28.6%と多かった。ほとんどのエピソードにおいて、年上の子どもが年下の子どもの物や場所を取ろうとしていざこざが生じていた。「物・場所の占有」が原因だった代表的なエピソードを事例1として表1に示した。事例1では、年上の子どもが1人で年下の子どもが2人だったが、2人は年上の子どもにも何も言うことができないでいた。

表1 【事例1】異年齢間の「物・場所の占有」

自由時間中にニンテンドーDSで遊んでもいい時間が設けられていた。借りる許可をもらっていたのは1年生のA（女児）とB（女児）と2年のC（男児）である。順番でAとBが先に遊ぶことになっていたのですが、2人でDSで遊んでいる場面。  
Cは2人の次に借りる予定で待っていたが、「遅い」などの文句を言って結局取り上げてしまった。  
AとBが先生に苦情を言いに行った。  
しかし、Cは返さずに長時間使っていた。  
AとBは何も言わずにCを見ていた。

(2) 同年齢同士と異年齢同士のいざこざの解決過程における使用方略の違い

ここでは、いざこざの解決過程における使用方略を分類し、同年齢と異年齢とで比較した。同年齢と異年齢の各方略カテゴリーに分類されたエピソードの割合を図2に示した。図2より、「拒絶・拒否」が、同年齢では32.7%、異年齢では39.3%と共に多かった。「や

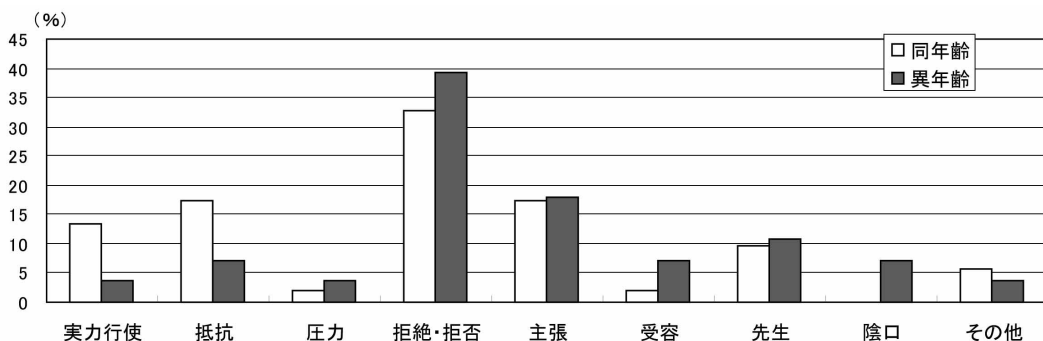


図2 同年齢と異年齢のいざこざの使用方略

めて」などのある程度意思表示は、相手が同年齢であろうと異年齢であろうと行われていることが示された。

同年齢同士では、「実力行使」と「抵抗」が異年齢同士よりも多かった。相手に強い意志を伝える方略は異年齢の間では使用されにくいことが示された。また、異年齢同士では、「圧力」や「受容」や「陰口」の使用が同年齢同士よりも多かった。数は少ないが、

表2 【事例2】異年齢同士の「陰口」

自由時間に、2年生のA（女の子）が先生のひざの上に乗って遊んでいた。同じ場所に3年生のB（女の子）と1年生のC（女の子）がいた。  
BがAを「赤ちゃんや。赤ちゃん。わーい。赤ちゃん」と手をたたきながらはやし立てた。  
AとCがしばらくして、「あの人嫌い」「あの人意地悪」「怖いよな」「あの人、すぐババアとか言う」「ほっぺ叩いたり、泣かしたりする」とさんざん小声で陰口を先生に話した。

「陰口」は同年齢のいざごごにはなく、異年齢にしかみられなかった。ほとんどのエピソードで、年上にあたる子どもは集団の中心にいるリーダー的な存在であり、面と向かって逆らえない状況であったため、年下の子どもの方は、相手の行動を受け入れながらも後で相手の陰口を言っていた。この「陰口」の方略が使われた代表的なエピソードを事例2として表2に示した。事例2で、Bは3年生であり、AとCの陰口からもわかるように女兒グループの中でも非常に強かった。人数では1人対2人であったが、年下のAとCは年上のBに直接的には言い返さずにいた。この事例より、異年齢間のいざごごにおいて、年下の子の方略として「陰口」が使われることが明らかになった。

### (3) 同年齢同士と異年齢同士のいざごごの終結の違い

ここでは、いざごごの終結を分類し、同年齢同士と異年齢同士とで比較した。その結果を図3に示した。図3より「自然消滅」が同年齢では40.4%、異年齢では35.7%と共に多

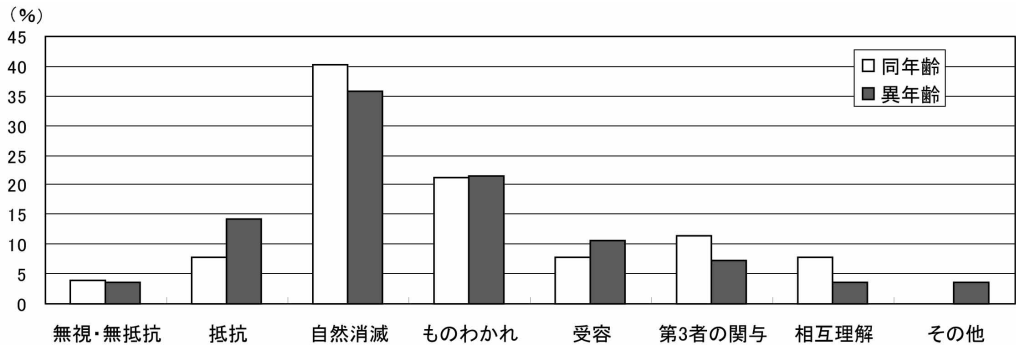


図3 同年齢と異年齢のいざごご終結

くみられた。次に「ものわかれ」が共に多かった。いざごごが生じても話し合いや謝罪をあまりせず、話し合いになってもうまく話がまとまらなかったり相手がいなくなってしまうなど、いざごごの終結が不明確であることがほとんどであるが明らかになった。また、いざごごの決着をブランコで早く高くこげるかどうかを競って決めようとして、そのまま普通の遊びに戻っていったエピソードもあり、様々な形で自然消滅での終結がみられた。

同年齢同士では、「第三者の関与」と「相互理解」が異年齢より

表3 【事例3】同年齢間の「自然消滅」

自由時間にグラウンドで遊んでいる場面。A（男児）は観察者をロープ遊びに誘って始めようとしていた。そこへB（男児）が来た。AとBはよく一緒にいるので、仲良しだと思われる。周囲には数人の男児たちが遊んでいた。AもBも周囲も全員1年生である。

Bが「僕もやる」と来た。

Aが「Bにはやらせんけん。おにごっこやろうとか言いよるけん」と拒否した。

Bが「言っていないやん」と反論。しばらくAとBの言い合いが続き、もみ合いや砂のかけ合いが始まった。

Aが「やめろ！やめろ！もういい！」と泣き叫びながら観察者のところまで来て抱き付いた。「謝れ！」とBに向かって言った。

Bと周囲が「Aが先に謝れ」「どうせAが悪いけん」「謝れって言った方が謝れ！」とAに言った。

AがBに「追いかけてやる」と怒鳴った。

そのまま、追いかけているうちに、いつの間にか遊びを再開していた。

多かった。異年齢同士では、「抵抗」と「受容」が同年齢より多かった。つまり同年齢同士のいざこざの方が、お互いに納得のいく終結になっており、異年齢同士のいざこざの方が、無理やり受容させられているようなこともみられ納得のいかない終結になっていることが示された。

同年齢・異年齢ともに多かった「自然消滅」でいざこざが終結したエピソードを事例3として表3に示した。この事例では、2人が怒鳴り合っており、殴り合いなどの激しい展開になりかけていたが、いつのまにかAとB、周囲にいた子どもたちまでも一緒にジャングルジムで遊びを再開していた。AもBも笑ってはしゃいでいた。全員が何事もなかったように振る舞っているようだった。

#### (4) 性別によるいざこざの原因の違い

ここでは、いざこざの原因を分類し、男児同士、女児同士、異性同士で比較した。その結果を図4に示した。図4より、男児同士では37.5%、異性同士では41.7%と「不快な働きかけ」が、女児同士では45.0%の「偶発」が最も多いことが示された。

「不快な働きかけ」の例としては、砂遊びで相手にわざと砂をかけたり、おにごっこで相手を罵ったりという場面が数ケースみられた。「偶発」の例としては、勉強や遊びにおいて相手を思いやった行動がかえって相手を怒らせたり困らせるという場面がほとんどであった。女児で多くみられた「偶発」が原因で生じたエピソードを事例4として表4に示した。事例から、Aは喜ばせようと行為に及んだが、相手のBはその行為を良くは思わず

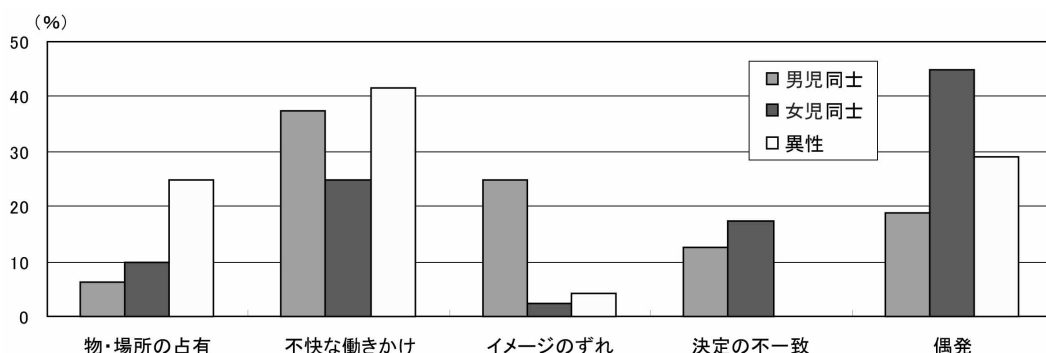


図4 性別のいざこざの原因

拒絶しており、意図せずにいざこざとなっていた。

「イメージのずれ」は、男児同士が他の女児同士や異性同士と比較するとかなり多かった。また、女児同士で「決定の不一致」が、男児同士や異性同士よりも多かった。これは、何をして遊ぶかなど

表4 【事例4】女児同士の「偶発」

数人で一緒に宿題をしている場面。1年生のAが1年生のBのプリントに名前を書いてあげようとした。  
Bが、「ちょーっと、ちょーっと、ちょーっと。助けて。書かないで勝手に」と拒絶した。  
Aが、「た」としか書けなかった」と残念そうに止めた。  
この後は何もなく終結した。結局Bは自分で組と名前を書いた。

の計画の段階で意見のぶつかり合いが多く、いざこざへと発展した。さらに、異性同士では「物・場所の占有」が多かった。このエピソードを詳しく調べると、男児が女児から物を横取りしようとする場面が多くみられた。

(5) 性別によるいざこざの解決過程における使用方略の違い

ここでは、いざこざの解決過程における使用方略を分類し、男児同士、女児同士、異性同士で比較した。その結果を図5に示した。図5より、「拒絶・拒否」が最も多く、男児

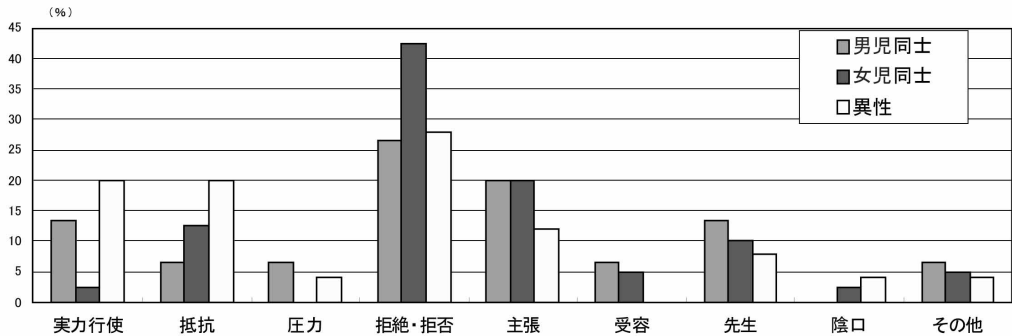


図5 性別のいざこざの解決過程における使用方略

同士では26.7%、女児同士では42.5%、異性同士では28.0%であった。また、男児同士と女児同士においては「主張」「先生」「受容」が多いが、異性同士では「実力行使」「抵抗」が多かった。異性同士のいざこざでも男児から女児へ実力行使をはたしている場面が多かった。また、同性同士であれば、「主張」方略を使用しているが、異性同士の場合は、主張しにくいことが明らかになった。

また、男児同士では「実力行使」と「圧力」の割合が女児同士よりも多く、女児同士では「主張」と「拒絶・拒否」が男児同士よりも多かった。男児は相手を力で押し込もうとするが、それとは対照的に、女児同士では言語的に対処する機会が多いことが示され

表5 【事例5】男児同士の「実力行使」

男児同士で野球をして遊んでいる場面。負けたチーム側の2年生のAと勝ったチーム側の2年生のBのやりとり。  
Aは、野球のゲームに負けて、不機嫌になっていた。  
Bが、「負けたくせに」と茶化した。  
Aが、Bの発言に怒り、Bに飛びかかり黙らせようとした。取っ組み合いに発展した。  
その後、周りにいた他の男児たちが間に入って止めて収まった。

表6 【事例6】女児同士の「拒絶・拒否」

3人（全員女児）で下足室の前で線踏みおにで遊んでいる場面。誘ったのは1年生のA、参加しているのは同じ1年生のBとC。初めは普通に線踏みおにで楽しんでしたが、それぞれが知っているルールの違いで度々中断した。  
Aは、鬼になりたくないため、タイム場などの設定を自分のルールや勝手な判断を通そうとしていた。  
BとCが、「絶対Aちゃんが鬼にならんでいいやん」と不服を言った。  
Aが、それでも続けようとした。  
BとCが、「Aちゃん勝手過ぎだよ」「ずっと同じ人が鬼でつまらん」と拒絶した。  
それでもAはルールや判断を変えようとはせず、結局BとCは部屋に戻った。



た。男児同士の「実力行使」を【事例5】、女児同士の「拒絶・拒否」を【事例6】として表5と6に示した。

(6) 性別によるいざこざの終結の違い

ここでは、いざこざの終結を分類し、男児同士、女児同士、異性同士で比較した。その結果を図6に示した。図6より、「自然消滅」が、最も多いことが明らかになった。特に男児同士では60.0%であった。また、男児同士と女児同士では「受容」がある程度みられるが、異性同士ではまったくみられなかった。異性同士では、「ものわかれ」や「抵抗」が多いことが明らかとなった。このことから、同性同士の方が異性同士よりも納得のいく終結になっていることが示された。

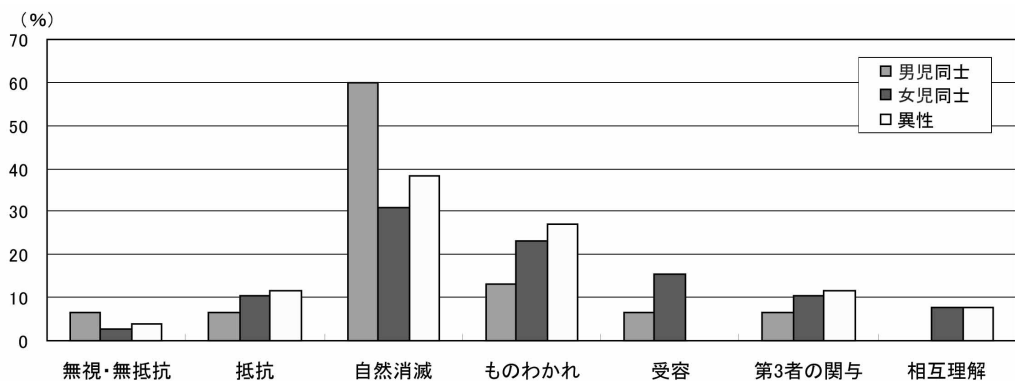


図6 性別のいざこざの終結

【考 察】

本研究の目的は、児童期のいざこざの原因・方略・終結の違いを、同年齢と異年齢、また同性と異性で比較し、相互交渉のあり方を検討することだった。

まず、エピソードを同年齢同士と異年齢同士とで分類し、原因・方略・終結の数と割合を算出した。従来の幼児期のいざこざの研究結果（梅本・財津，2000）と比較しながら考察をしていく。

年齢によるいざこざの原因の違いについては、従来の研究の幼児期では「不快な働きかけ」が同年齢と異年齢ともに高く、「偶発」がほとんどなかった。本研究の児童期では、全体的に「不快な働きかけ」が多かったが、同年齢は「偶発」、異年齢は「物・場所の占有」が多かった。「偶発」においては、良かれと思って行った行動が相手にとっては不快でありいざこざになったものなので、年齢に伴い他人を意識し思いやる行動が増えたといえるのではないだろうか。また、「物・場所の占有」は先行研究によると、異年齢より同年齢に多くみられたが、本研究では同年齢より異年齢に多くみられた。幼児期は同年齢同士で物の取り合いをしていたが、児童期では同年齢同士では減少するものの、異年齢同士ではまだ物の取り合いがいざこざの原因になっていた。年上から年下へはたらきかけてい

たエピソードが多いことから、年上の子どもの方が年下の子どもよりも優位な立場にあり、物をとりあげようとしていざこざになる傾向があると考えられる。

次に、年齢によるいざこざの解決方略について考察する。同年齢同士における使用方略は「実力行使」や「抵抗」というような行動方略が多かったが、異年齢同士では「受容」や「陰口」がみられた。これは年下の子どもが年上の子どもの要求を結局は受け入れざるを得ない状況になり、いざこざの後にその不満を第3者につける形で発散しているのではないかと考えられる。

さらに、年齢によるいざこざの終結については、同年齢・異年齢ともに「自然消滅」と「ものわかれ」が多かった。先行研究においては、同年齢同士では「自然消滅」が、異年齢同士では「無視・無抵抗」が多く「抵抗」はみられなかった。これらを比べると、幼児期のいざこざも児童期のいざこざも、話し合いをすることなく自然に終結している割合が多いことが明らかになった。また、「第3者の関与」、「相互理解」は同年齢の方が異年齢より多く、「抵抗」、「受容」は異年齢の方が同年齢より多かった。つまり同年齢同士のいざこざの方が、お互いに納得のいく終結になっており、異年齢同士のいざこざの方が、無理やり受容させられているようなこともみられ納得のいかない終結になっていることが明らかになった。

次に、性別によるいざこざの原因について考察する。男児同士、異性同士では「不快な働きかけ」が、女児同士では「偶発」が多かった。女児同士の「偶発」においては、援助行動から生じたいざこざも少なくないことから、相手に対する気遣いを示すが、相手にありがた迷惑に思われてしまう場合があると考えられる。男児同士の「不快な働きかけ」においては、故意にはたらかけてどこまで許されるのかなどの相手の反応を見ることで仲間関係を意識し、コミュニケーションをとろうとしていることが、相手にとっては迷惑で、いざこざにつながってしまっているのではないかと考えられる。

また、性別によるいざこざの解決方略についてであるが、女児同士、男児同士、異性同士ともに「拒絶・拒否」が多かった。男児同士と女児同士においては、「主張」が次に多いが、異性同士は「実力行使」や「抵抗」が次に多かった。このことから、いざこざの相手が同性の場合は言語的に主張をすることができ、解決しようとしているが、相手が異性になると、言語的に対応せず力づくで解決しようとする人が多いと考えられる。

最後に、性別によるいざこざの終結について考察する。男児同士、女児同士、異性同士ともに「自然消滅」が最も多い。男児同士は、方略の段階で拒絶したり強引に意見を押し通そうとしたりするが、結局はまた何事もなかったかのように通常の接し方に戻っている場合が多かった。また、「ものわかれ」や「相互理解」がほとんどみられなかったことから、話し合いや譲り合いをあまりしていないようである。一方、女児同士では、方略では「拒絶・拒否」を用い、「受容」で終結しているエピソードもあった。どちらかが妥協し、相手の意見や行動を受け入れて解決しようとしていることが示された。つまり、同性同士の方が「受容」のような納得した終結がみられるが、異性同士の方は「ものわかれ」や「抵抗」などの納得のいかない終結が多かった。

本研究で、児童期でもいざこざが多く起きていることが示された。いざこざの原因は、「不快な働きかけ」が多く、方略は「拒絶・拒否」が多く、終結は「自然消滅」が多かっ

た。このような全体的傾向は幼児期のいざこざと大きな違いはなかった。つまり、児童期であっても「不快な働きかけ」によって相手と関わろうとしたり相手の反応を試したりするようなコミュニケーションを行っている。また、児童期に発達的に高度で複雑な方略や終結が行われているわけではなく、自然に他の遊びに移行して関係を修復することが日常的なコミュニケーションの特徴であると考えられる。

同年齢と異年齢の違いについては、異年齢同士の方が「物・場所の占有」が多く年上の子が年下の子に働きかけていざこざが生じていた。それに対して、年下の子は抵抗できずに受容したり陰口をたたくなどして、結局納得のいかない終結になっているようである。従って、児童期では同年齢同士ではある程度納得のいくいざこざの解決ができるが、対等でない異年齢同士のいざこざは年上の子ども優位で解決されていることが明らかになった。これは、幼児期の研究と共通した結果であった。つまり、児童期になって年上の子が年下の子に譲るといような行動が増加するわけではなかった。しかし、児童育成クラブでのこのような異年齢間のいざこざの経験は、コミュニケーションの発達には重要な役割があるのではないかと考えられる。

性別による違いは、特に原因にみられた。女兒は「偶発」が多く、良かれと思って行った行動がいざこざにつながるが、男児は「不快な働きかけ」が多かった。このことから、女兒は優しく接することで友達関係を深めていくが、男児はちょっかいを出してけんかしながら友達関係を深めていくという違いがあるのではないかと考えられる。また、同性同士の方が納得のいく終結にいたりやすいが、異性同士であると納得のいかない終結になりやすいことが示された。

このように異年齢間や異性間のいざこざでは、表面的には受容しているように見えても納得のいっていない終結になっている可能性も示され、異質な関係におけるコミュニケーションの難しさが明らかになった。異質な関係性の経験が、子どもの社会性や対人スキルの発達に及ぼす影響について今後さらに検討する必要があるだろう。

#### 【引用文献】

- 浅賀万里江・三浦香苗 2007 集団保育場面における幼児のいざこざの意義に関する一考察—量的・質的分析の両面から— 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 10, 55-64.
- 平林秀美 2003 子どものいざこざをめぐる—社会性の発達の視点から— 東京女子大学紀要論集, 53, 89-103.
- 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達 埼玉大学紀要教育学部(教育科学)(I), 35, 1-15.
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究, 3, 1-8.
- 倉持清美 2001 仲間と出会う場としての園 無藤隆(編) 保育・看護・福祉プリマーズ⑤発達心理学 ミネルヴァ書房, 109-126.
- 岡崎弘奈 2008 使用方略間の関連性よりみた5歳児のいざこざの特徴 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 11, 93-103.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ

- (編) 子ども時代を豊かに－新しい保育心理学－ 学文社, 59－111.
- Shantz, C.U. 1987 Conflicts between Children. *Child Development*, 58, 283-305.
- 高濱裕子・無藤隆 1999 仲間との関係形成と維持－幼稚園期3年間のいざこざの分析－  
日本家政学会誌, 50, 465－474.
- 高坂聡 1996 幼稚園児のいざこざに関する自然観察的研究：おもちゃを取るための方略  
の分類 発達心理学研究, 7, 62－72.
- 田中洋・阿南寿美子・安部奈々子・糸永珠里・松尾明子 1997 3歳児におけるいざこざ  
の発生と解決過程 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 21, 357－368.
- 梅本あゆみ・財津茜 2000 子ども同士のいざこざ解決過程の発達の变化 大分県立芸術  
文化短期大学コミュニケーション学科藤田研究室卒業論文集, 68－79.
- 山口優子・香川克・谷向みつえ 2009 保育園児のいざこざプロセス 関西福祉科学大  
学, 13, 247－260.

#### 【付 記】

本研究を進めるにあたりご協力いただきました、児童育成クラブの指導員の先生方に心よりお礼申し上げます。また、本研究をまとめるにあたり、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科2007年度卒業生木村花織さんと伴春香さんにご協力いただきました。ここに記してお礼申し上げます。

本研究の一部は、九州心理学会第71回大会において発表された。

【付 録】

いざこざの原因のカテゴリー表

カテゴリー	内 容
物・場所の占有	物や場所の所有について主張しあい取り合う
不快な働きかけ	相手に対し故意に嫌がることをする
イメージのずれ	「この砂は砂糖」「違うよ、塩だよ」などお互いのイメージの違い
決定の不一致	「鬼ごっこしよう」「やだ、かくれんぼしよう」など遊びの内容、役割を決めるときの要求や主張の違い
偶 発	故意にはないが、相手に対しての働きかけが相手に不快をもたらし、いざこざが生じる

いざこざの解決方略のカテゴリー表

カテゴリー	内 容
実 力 行 使	相手に対し身体攻撃を加えたり、強引な手段をとったりする 例：何もしてこない相手を一方的にたたく・蹴るなど
抵 抗	相手の言動を行動で否定 例：やり返すなど
圧 力	相手が怯むような態度や発言（脅しなど） 例：相手を威嚇するなど
拒 絶 ・ 拒 否	相手の言動を言葉で否定 例：「やめて」「取らないで！」等のような拒む発言
主 張	自分の考えを相手に伝える
受 容	相手の発言や行動を受け入れる
謝 罪	自分の非を認めて謝る
先 取 り	(道具など) 先に使っていたことを示す
独 占	(道具など) 独り占めしていることを示す
使 用 中	(道具など) まだ使っていることを主張する
使 用 目 的	(道具など) 使う目的を示す
先 生	先生など大人に告げて助けをもらう
陰 口	本人の目の前では言わず、第3者に悪口を言う

いざこざの終結のカテゴリー表

カテゴリー	内 容
無 視 ・ 無 抵 抗	相手の不当な行為に対して抵抗や抗議を示さずに無視、その場を立ち去る、泣くなど無抵抗のまま終結する
抵 抗	原因行動に対して相手が簡単な反応行動をするだけで終結する
自 然 消 滅	明確な解決に至ることなくなんとなく終わり、そのまま遊び始める場合 例：当事者のどちらかもしくは両方が去ってしまう。 謝罪等なしにまた遊び始める。いつのまにか別のことになり変わっている
も の わ か れ	話し合いをするがいざこざの継続・和解の努力を放棄し未解決のまま終結する
受 容	相手の要求を受け入れて解決する
第 3 者 の 関 与	先生・親・他の友達を関与させて解決する
相 互 理 解	話し合ったり謝罪することで終結や和解への努力が払われ、お互いに納得と了解を示して解決する